

社会的絆の光と影

— 人間関係における「絆」とその役割とは —

高 木 修

(現代産業社会と人間関係研究班研究員)
社 会 学 部 教 授

戸 口 愛 泰*

(相愛大学人文学部講師)

問 題

近年、少子・高齢化、グローバル化、高度情報化のもと、社会やそれを取り巻く対人関係の様相が劇的に変貌している。そのため、増加の一途をたどる犯罪やいじめ、虐待などの社会問題の原因を特定することは容易ではない。厚生労働省（2003）が取りまとめた資料によると、平成15年度の児童相談所における虐待相談の処理件数は26569件であった。相談の種類別では、身体的虐待が12022件（45%）、性的虐待が876件（3%）、心理的虐待が3531件（13%）、そしてネグレクトが10140件（38%）と相談内容も時代を反映している。本研究では、これらの現状を理解するための一つの手がかりを得るために、人間関係の中核となる人と人との「絆」関係に着目する。より具体的に記せば、家族間、夫婦間、友人間、組織構成員間、地域住民間などの人間関係における諸問題を、とりわけ、絆の形成、拒絶、そして崩壊といった人間関係の光と影の側面から、社会・心理学的に研究することが主要な目的である。

また、人間関係のあり方とは、人々の安寧や幸福に、ひいては社会の秩序や安定性、発展性にも影響する最も強力な要因の一つだとされている。人間関係の功罪に対して、多様な観点から複層的にアプローチすることによって、現代の複雑で多様化した人間関係の様相を理解し、個人や社会の安寧・秩序促進に資する「絆」のあり方について提言することも本研究の目的である。

ではまず、人と人が「絆」で結ばれるということは、どのような現象を指し、それがどのような働きをするのかを検討してみよう。辞典によれば、「絆」は次のように定義されている。

「断つにしのびない恩愛。離れがたい情実。係累（つなぎしばること。良心を拘束するわ

* 現代産業社会と人間関係研究班共同研究者

ずらわしい物事。特に、自分が世話すべき両親、妻子、兄弟など)。繫縛(つなぎしぼること)」(広辞苑、第3版)。

「家族・友人などとの結びつきを、離れがたくつなぎとめているもの」(大辞林、第2版)。

「人と人との断つことのできないつながり。離れがたい結びつき」(大辞泉)。

換言すると、「絆」とは人と人との断つことのできない情緒的なつながりのことである。しかし、現段階では「絆」現象についてのより具体的な記述は見当たらず、不可解な要素も多く含まれる。さらに「絆」自体にはアンビバレントな意味も含まれており、特に昨今では「しがらみ」や「息苦しさ」といった個人や組織の自由が「絆」によって束縛されるマイナス面も強調されており、安易に人とのつながりの頑強さを求めることには危険が伴うとも考えられる。そこで本研究では、「絆」とは一体何を指し示し、どのような役割を担っているのかを探求する。その試みとして、まず、①人々が「絆」について抱いているイメージや他者と絆で結ばれることに対する態度(考え、意見など)を自由記述法による調査で収集し、その結果を内容分析することによって、「絆」の構造を解明する(研究1;高木・戸口, 2006;戸口・高木, 2005a)。つぎに、②その構造に基づいて、絆で結ばれることに対する態度を測定する尺度を作成する(研究2;高木・戸口, 2006;戸口・高木, 2005b)。さらに、③絆で結ばれた関係をより具体的に理解するために、類似の心理学の概念との関連性を検証し(研究3;戸口・高木, 2006)、④絆関係が仮定される二者関係における絆に対する態度と関係満足度との関連性を検討する(研究4)。上記目的に沿った多様な分析を通じて、今日的な「絆」の有り方とその功罪に接近することを目的とする。

研究 1

目的

人と人が絆で結ばれることに対する態度を測定する尺度の作成するために、絆についてのイメージと絆で結ばれることに対する態度の具体的な意見表明(ステートメント)を収集する。

方法

調査協力者

関西圏の私立K大学の心理学系講義を受講する大学生に、彼ら自身と社会人(彼らの親族や友人)に対する調査を依頼した。学生には、2~3票の調査票を持ち帰らせ、後日回答済みの1~3票の調査票を回収した。記入漏れのある調査票を除いた上で、回答者の年齢と婚姻状況にしたがって、調査協力者を30歳以下の青年群(16歳~28歳、未婚)と30歳以上の大人群(33歳~74歳、既婚)に分割した。彼らの人数(性別内訳、平均年齢とその標準偏差)は、前群が

194名（男性79名、女性115名、平均年齢20.9歳、 $SD = 1.7$ ）、後群が72名（男性24名、女性48名、平均年齢は50.3歳、 $SD = 6.2$ ）であった。

調査票の構成（質問内容）

「絆」という語を示し、「絆」とはどういうものか、どのようなことが「絆」なのかをできるだけ具体的に、また、多く記述することを求めた。

結果

記述内容の分類

大学生本人と社会人（彼らの親族・友人）に回答を依頼したが、本人の他に、友人や親、親戚の回答が混在していたことから、前述のように、未婚の青年群と既婚の大人群とに分け、それぞれの群ごとにKJ法（川喜田，1967）で記述内容の分類を行った。その結果、2つの群から得られた総記述（票）数は、同じ記述も含め869票であった（大人群254票、青年群615票）。

分類後の抽出カテゴリーは、大人群、青年群ともに5カテゴリーと数が同じであり、しかも、2群間にカテゴリー内容の類似が見られた。各カテゴリーの概要を以下に記す。なお、以下の見出しカテゴリーは、複数の下位カテゴリーからなる上位カテゴリーを意味し、大人群と青年群における票数の内訳を群内の割合（%）で示している。また、下位カテゴリーには、実際の票数を付記してある。

A. 絆関係に伴う情緒（大人群31.1%、青年群26.2%）

大人群：絆関係に伴う情緒を表す記述であり、その反応数を集計した結果、「信頼」（32票）が最も多く、これに「愛情」（25票）と「思いやり」（10票）が続き、その他に、「尊敬」（3票）や「安心感」（3票）などの正の感情も含まれていた。逆に、「愛憎」（1票）や「憎しみ」（1票）といった負の感情の記述も少数ながら見受けられた。

青年群：大人群と同様に、絆関係に伴う情緒を表す記述であり、「信頼」（70票）が最も多く、これに「友情」（24票）と「愛情」（23票）が続き、その他に、「思いやり」（17票）や「安心感」（8票）などの正の感情も含まれていた。逆に、「時には煩わしい」（2票）といった絆関係の負の側面も見られた。

B. 絆関係自体の特性（大人群34.6%、青年群45.4%）

大人群：絆関係自体の特性を表す記述であり、絆関係を「つながり」（16票）、「結びつき」（10票）、「縁」（8票）のように人と人とが結びついているものと捉えながら、それが「切れない」（15票）や「見えない」（5票）ものとして認識している。逆に、「どろどろした」、「強いと難しい」、「切れやすい」といった負の特性（計5票）も見られ、絆のアンビバレントさが窺える。また、「損得なし」（6票）や「自分では選べない」（3票）といった記述も含まれていた。

青年群：絆関係自体の特性を表す記述であり、大人群と同様に、絆関係を「つながり」（56票）

や「結びつき」(29票)のように人と人(あるいは物や心)がつながれているものと捉え、そのつながりが「切れない」(46票)もの、「大切」(16票)なもの、「強い」(13票)ものとして認識している。さらに、「見えない」(28票)ものといった捉え方や、「距離や時間による影響がある(ない)」ものなどの記述もあった。なお、大人群では記述のなかった「永遠」(10票)が見られたように、青年群においては母親との絆は不変なものなのであろうか。しかし、「修復が難しい」や「壊れやすい」などの負の特性(計7票)も確認され、強く切れない絆関係だけではなく、絆を構築する対象や絆の種類によって内容の変わることが窺える。

C. 絆関係が成立する場(大人群14.2%、青年群8.9%)

大人群:絆関係が成立する場を表す記述であり、「血縁」(15票)、「家族」(13票)、「友人を含む具体的な関係」(8票)で構成されている。

青年群:大人群と同様に、絆関係が成立する場を表す記述であり、「家族」(19票)、「血縁」(12票)、「恋人」(3票)などが、また、「人間関係」、「親密な関係」、「切れない関係」といった抽象的な「関係性」(計25)についての記述も見られた。

D. 絆関係の有り様(大人群17.3%、青年群17.6%)

大人群:絆関係の有り様を表す記述であり、「相互」(9票)、「受容」(8票)、「援助」(4票)といった相手と一体感を持ち、助け合うといった記述が見られた。また、「苦楽を共にする」(5票)、「同じ目標をもつ」(6票)、「共に住む」(4票)といった大人群特有の共通運命的な記述も認められた。

青年群:大人群と同様に、絆関係の有り様を表す記述であり、「理解」(12票)、「援助」(17票)、「相互」(17票)といった相手を理解し、助け合うなどの記述が見受けられた。さらに、「コミュニケーション」(11票)や「言葉が不要」(11票)のように本音でつきあうことができ、以心伝心が可能な関係と捉えていることも分かった。

上述の「B. 絆関係自体の特性」カテゴリとの違いは、Bは絆関係のある種の現象ととらえ、そのイメージを表現するものであるのに対し、Dは絆で結ばれている人との関係性の有り様を表しており、絆が関係性へ与える影響や性質であると解釈できる。

E. 絆関係と自己の関わり方(大人群2.8%、青年群2.0%)

大人群:絆関係を自己の関わり方の側面から記述したものであり、「他者優先」(7票)で構成される。「自己」カテゴリではあるが、大人群においては、他者への配慮を示す上で自己の存在を認識していることが窺える。

青年群:大人群と同様に、絆を自己の関わり方の側面から記述したものであり、「自己中心性」(7票)と「他者優先」(5票)が含まれている。前者では、絆関係とは自己の思い込みや自分次第であると述べ、後者では、絆関係には自己犠牲や利他性が伴うことが示されている。前者の自己中心性は青年群にのみ顕著に示されていた。

以上のように、カテゴリ内容は両群間で類似しており、同じカテゴリ名を使用したか、

大人群の記述には、青年群よりも、実際の経験に基づいた内容が多く含まれていた。そのことから、絆で結ばれる可能性のある関係性（例えば、夫婦、家族）の経験度が、絆の実態を捉える上で、またデータの信頼性を高める意味でも重要であることが示唆された。

考 察

研究1の結果、人々のもつ「絆」についての考えやイメージが5つのカテゴリーに分類でき、それらの内容から「絆」には正の側面だけでなく負の側面も存在することが示唆された。

記述内容に青年群と大人群の差異が見られたが、それらは、「絆」の経験度の違いを反映していると推定される。この経験度の違いとは、既婚者で、かつ、大半が子供をもつ身である大人群において、自らの働きかけから絆関係を能動的に構築してきた経験が、青年群と較べて、相対的に豊富であるということである。他方、青年群では、未婚であることから、最も身近な絆対象は親や兄弟と考えられ、絆の存在が当然のこととされる受動的な絆関係しか経験していない可能性が高い。分類カテゴリーでは、両群間に大きな違いはなかったが、この点については、今後さらに詳細に検討する必要があると考える。

また、絆関係は、種々の対象との間で構築されるものであり、対象によって絆関係の意味合いも異なる可能性がある。だとしたら、絆の対象を特定し、特定の関係性における絆関係の問題を取り扱わなければ、調査で回答する側も実際の態度やイメージを浮かび上がらせることが難しいであろう。その点を考慮して、研究2では、特定の絆関係、つまり、母子間の絆について検討することにする。

研 究 2

目 的

絆関係の現象を捉える場合、その前提として、絆関係を結ぶ種々の対象が存在し、そこに複数の絆関係が複合的に成り立っていることを考えねばならない。すなわち、様々な関係性において異なる絆関係が存在すると考えられる。また、人々がある対象との絆を「強い」、「弱い」、「細い」、「太い」などと表現することは、その対象との絆関係の有り様を述べているだけでなく、さらには、それを通じて絆で結ばれている相手についての「理解」を表現していることに他ならない。絆関係とは、あらためて意識しないとその存在に気づかないほど、その存在が当然のものである場合が多く、相互に絆の存在を確信し合っている関係である。特に、親子関係は運命的に決定づけられており、子に生まれてくる選択権はない（河合、1980）。同様に、親も子供を多くの中から選択できるわけではなく、必然的に絆意識を持ちやすい関係といえよう。

以上のことから、研究2では、絆関係が当然のこととして想定される関係の中の母子関係を焦点を当て、まず、研究1で得られたカテゴリーをもとに、母子間の絆関係に対する態度やイ

メージを測定するのに相応しい項目を選択し、尺度構成を試みる。

方 法

調査協力者

関西圏の私立K大学とO大学の心理学系講義の受講生120名（男性30名、女性89、不明1名）とその母親74名に調査を依頼した（2005年4月下旬・7月下旬）。学生の平均年齢と標準偏差は20.48歳（ $SD = 1.75$ ）、レンジは18-32歳、平均の兄弟数は2.38人（ $SD = 1.03$ ）、レンジは0-6人、家族との同居者は120名中87名（不明1名）、母親の平均年齢と標準偏差は50.33歳（ $SD = 4.47$ ）、レンジは42-61歳、平均の兄弟数は2.81人（ $SD = 1.22$ ）、レンジは0-6人、平均の子供数は2.47人（ $SD = .82$ ）、レンジは1-5人、大学生の子供との同居者は74名中64名（不明1名）である。

質問紙の構成（質問内容）

母子間の絆尺度：母子それぞれが絆で結ばれることに対して抱いている態度を測定するために、研究1のKJ法から得た5カテゴリー（絆関係に伴う情緒、絆関係自体の特性、絆関係が成立する場、絆関係の有り様、絆関係と自己の関わり方）から票数の多い記述や重要と思われる記述を中心に48項目を選定して、絆尺度を構成した。そして、それぞれの項目の内容が自分の考えにどの程度該当するかを、「とてもそうである」（6点）から「全くそうでない」（1点）までの6件法で回答することを調査協力者の学生と彼らの母親に求めた。

結 果

尺度の構造説明

学生（以後は子どもと記す）とその母親の計194名から得られた（1）の母子間絆尺度の評定データに基づき因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、“絆で結ばれていると、幸せである”、“絆があると、嬉しい”、“絆は、心の支えになる”、“絆で結ばれていると、困難も乗り越えられる”といった絆がもたらすポジティブな効果と、“結ばれるためには、助け合うことが必要”、“愛情が必要”、“信頼が必要”、“尊敬することが大事”、“お互いを理解することが必要”、“思いやりが必要”といった絆を構築する上で必要なことを示す12項目からなる「絆の心理的効用と成立要件」因子（この因子で構成した下位尺度の信頼性、 $\alpha = .86$ 、以後同じ）、“絆は、時にわずらわしいものになる”、“時に憎しみが伴う”といった絆の否定的情緒側面と、“絆は、時に不安定なものになる”、“一方通行的なものになる”、“自分次第でいくらかでも変わる”といった絆の不安定な側面とを示す8項目からなる「絆の否定的・不安定性」因子（ $\alpha = .77$ ）、“絆は、いつの間にか自然にできているもの”、“意図的に作ろうとするものではない”といった絆の自然発生的な特性と、“長い間会えなくても切れないもの”、

“離れて住んでいても切れない”といった絆の安定性を示す5項目からなる「絆の自然発生的・安定性」因子 ($\alpha = .73$)、そして、“絆からは逃げられない”、“絆は宿命的なもの”、“切りたくても切れないもの”といった絆のつなぎ縛るという特性を示す4項目からなる「絆の繋縛性」因子 ($\alpha = .67$) の4因子が抽出された。

考 察

研究2の結果、母子関係に存在する「絆」の4つの特徴が確認された。それらの因子名には、あえて負の側面を逆転せずに用いたが、被調査者の回答には、負の側面を否み、絆の構築は難しくないと肯定的に捉える傾向が見受けられた(高木・戸口, 2006; 戸口・高木, 2005a)。また、母親群とは異なり、子ども群では、自らの働きかけから絆を能動的に構築する経験が相対的に少ないため(調査協力者全員が未婚者)、最も身近な絆関係である母子関係においても、その受動的な捉え方ゆえに絆関係の脆さが示唆された(高木・戸口, 2006; 戸口・高木, 2005a)。これから青年期後半に突入し、母親との過去に例のない葛藤関係を経験する場合、既存の母子関係に何らかの変容が訪れると予想される。また、研究1と同様に、母子関係における母と子の視点の違いも検討を要する問題であろう。つまり、青年群の場合、母子の絆とは、程度は別として、生まれてきた時には既に存在するものである。しかし、大人群、特に母親の場合、「実母との絆」、そして「実子との絆」が対象となることから、受動的な絆と能動的な絆の双方を長年にわたって経験してきた彼女らの絆に対する考えは非常に興味深いものである。

研究2では、母親との絆関係を量的に捉えるために尺度の構築を試みたが、尺度の構成概念妥当性を検討するためには、心理的に類似する概念との関連性を検証する必要がある。

研 究 3

目 的

近年、信頼(または信頼感)に関する研究がますます注目を集めるようになってきた。信頼とは、その名のとおり信じて頼ることであるが、信頼の重要性を唱えた研究では、「対人間の信頼」(Rotter, 1980)、「人間関係的信頼」(山岸, 1998)、「対人的信頼感」(酒井, 2005)など多様な概念化が進められ、蓄積された知見からは、その対象が一般的他者なのか、重要他者なのかによって信頼の定義が変わるという問題も指摘されている(酒井, 2005)。研究3では、信頼(または信頼感)が絆概念を構成する要素であるとの想定のもと、両概念間に密接な関係が存在するのではないかという問題意識から、研究2で構築した絆尺度といくつかの信頼性尺度との関連性を検討する。

方 法

調査協力者

関西圏の短・大学生220名（男性65名、女性148、不明7名）とその母親30名に調査を依頼。学生の平均年齢と標準偏差は20.34歳（ $SD = 1.51$ ）、母親の平均年齢と標準偏差は49.14歳（ $SD = 4.07$ ）である。

質問紙の構成（質問内容）

- ① 母子間の絆尺度：母子間の絆に対する態度を測定すべく、研究2で選定した48項目に基づく絆尺度を使用した。回答への負担を減らす意図から、語尾を「思う」・「したことがある」といった非断定的なものに変更した。そして、それぞれの項目の内容が自分の考えにどの程度該当するかを、「とてもそうである」（6点）から「全くそうでない」（1点）までの6件法で回答することを求めた。
- ② 对人的信頼感尺度：酒井（2005）で使用された14項目からなる尺度を使用した（下位尺度：信頼されている感、信頼している感）。母子間の絆尺度と同様に、6件法で回答を求めた。
- ③ 一般的信頼尺度：山岸（1998）、辻・針原（2002）、林（2004）において使用された4項目からなる尺度を使用した（1.ほとんどの人は、基本的に、正直である、2.ほとんどの人は、信用できると思う、3.ほとんどの人は、基本的に、善良で親切であると思う、4.私は、人を信用する方である）。母子間の絆尺度と同様に、6件法で回答を求めた。
- ④ 信頼感尺度：天貝（1995；1997）によって開発された18項目からなる尺度を使用した（下位尺度：自分への信頼、他人への信頼）。母子間の絆尺度と同様に、6件法で回答を求めた。

結 果

尺度の構造解明

学生とその母親の計250名のデータを対象に母子間の絆尺度の因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、絆で結ばれると安心であり、絆は心の支えといった絆が存在することによる心理的なメリットを示す12項目からなる「絆の心理的効用」因子（ $\alpha = .92$ ）、絆にはお互いの理解や信用、愛情が必要であるといった絆で結ばれるための理想的な先行条件を示す7項目からなる「絆の成立要件」因子（ $\alpha = .79$ ）、絆を持つことに対するわずらわしさ、憎しみ、損得などの否定的側面を示す6項目からなる「絆の否定的・不安定性」因子（ $\alpha = .81$ ）、そして、絆は目に見えない、自然にできるといった側面を示す3項目からなる「絆の自然発生性」因子（ $\alpha = .79$ ）が抽出された。

研究2において抽出された因子のうち、「絆の心理的効用と成立要件」因子が本研究では二つに分かれ、安心や愛情を軸とした、絆があることに対する効用の側面と、絆を構築するために必要となる条件の側面がそれぞれ独立の因子として抽出された。これは、絆があることへの

安心感や、失いたくない願望、一体感、自己犠牲もいとわないなどの項目が、今回あらためて「絆の心理的効用」として評価されたのであろう。この結果として、絆構築に必要と考えられる条件としての「絆の成立要件」因子が独自の因子として抽出された。「絆の否定的・不安定性」因子は因子の安定性が高く、前回と同様の項目で構成された。「絆の自然発生性」因子は、前回の「絆の自然発生的・安定性」因子から、期間と距離によって絆が崩壊する可能性をうたった項目が落ち、絆の自然発生的な側面のみが残ったため、因子名から安定性が外れた。なお、本研究においては、「絆の繫縛性」が因子として抽出されなかった。

对人的信頼感尺度においては、相手が自分に対してどのような感覚を抱いているかを示す7項目（「信頼されてる感」因子）と自分は相手に対してどのような感覚を抱いているのかを示す8項目（「信頼している感」因子）からそれぞれ構成される下位尺度の信頼性の検定を行った結果、前者は $\alpha = .86$ 、後者は $\alpha = .91$ と十分な値が確認された。

一般的信頼尺度の4項目での信頼性の検定を行った結果、 $\alpha = .88$ となり、同じく安定性が確認された。信頼感尺度においては、自分への信頼を示す6項目と他人への信頼を示す8項目でそれぞれ構成される下位尺度の信頼性を検定した結果、前者が $\alpha = .85$ 、後者が $\alpha = .88$ となり安定性が確認された。

尺度間の関連性

絆尺度と信頼性尺度との関連性を検討するために、全調査協力者のデータに基づいて尺度・下位尺度間の相関分析を行った。その結果、「絆の否定的・不安定性」や「絆の成立要件」と「自分への信頼」や「他人への信頼」の間、「絆の自然発生性」と「一般的信頼」の間以外において、有意な相関が確認できた（Table.1参照）。

絆尺度の下位尺度と信頼性尺度の下位尺度との関連性についてみると、「絆の心理的効用」では、特に「信頼している感」との強い正の相関（ $r = .76, p < .01$ ）が認められ、概念間の類似性が示唆された。「信頼している感」とは、私は○○と一緒にいて幸せだ、○○のことは信頼できる、○○は私が元気のないときに支えになってくれるなど、信頼関係が存在する時の心理的効用を含んでおり、これは絆関係が存在する時の心理的効用と同義である。母子関係においては、信頼があることと絆があることは同じことであると解釈できるのかも知れないが、どちらが上位概念なのか、または共有の要素をもつ並列的な関係なのか、今後の研究で明白にする必要がある。

同様に、「絆の心理的効用」は、「信頼されている感」とも高い相関（ $r = .52, p < .01$ ）を示しており、絆を結ぶことによる自分自身への心理的効用が上がれば、相手からの信頼も上がることを意味し、絆の相補性が裏付けられた結果といえる。この結果は、一見、相手との絆ができることによって、自分も相手を信頼し、相手からも信頼を受けると考えられるが、「信頼されている感」は、あくまでも自己による相手からの信頼に対するメタ認知であることに注意し

Table. 1 下位尺度間の相関係数

下位尺度名	1	2	3	4	5	6	7	8
1 絆の心理的効用								
2 絆の成立要件	.53 **							
3 否定的・不安定性	-.40 **	-.08						
4 自然発生性	.30 **	.30 **	-.13 *					
5 信頼されてる感	.52 **	.31 **	-.32 **	.26 **				
6 信頼している感	.76 **	.45 **	-.43 **	.29 **	.71 **			
7 一般的信頼	.26 **	.24 **	-.15 *	.09	.30 **	.34 **		
8 自分への信頼	.21 **	.21 **	-.08	.16 *	.37 **	.19 **	.42 **	
9 他人への信頼	.36 **	.39 **	-.11	.29 **	.37 **	.35 **	.74 **	.62 **

**= $p < .01$, *= $p < .05$

なければならない。実際の他者評定では、結果が異なる可能性も否定できず、絆の関係にあることによって「ポジティブ幻想」(Taylor, 1989)が働いた可能性も考えられる。また、「絆の心理的効用」は、一般的他者に対する信頼感(「他人への信頼」)とも十分な相関($r = .36$, $p < .01$)があり、絆の存在による自己への心理的メリットを実感していれば、一般的他者への抽象的な信頼感も増す可能性が示唆された。

「絆の成立要件」は、特に、「信頼している感」や「信頼されている感」と高い正の相関(前者: $r = .46$, $p < .01$; 後者: $r = .31$, $p < .01$)を示している。「信頼している感」は、上述のとおり、信頼感が存在する時の心理的効用を含み、そのような効用があると思うほど、絆を構築するために必要な条件が存在するという認識も上がることを意味する。また、実際に信頼することと、信頼が成立するための要件が存在すると考えることとは異なるためか、「絆の心理的効用」よりも若干相関が低い。母親との絆は生まれた時から発生するが、その時点で信頼はまだ存在せず、その後の養育関係の中で獲得される後付け的な絆の補強要因である可能性も考えられる。

「絆の否定的・不安定性」は、他の信頼性尺度と負の相関を示しており、下位尺度の妥当性が確認されたといえよう。特に、「信頼している感」とは強い負の相関($r = -.43$, $p < .01$)を示し、母への信頼が強いほど、母との絆は否定的にならない、むしろ肯定的であると捉える傾向の存在が明らかとなった。また、「自分への信頼」や「他人への信頼」との間には有意な相関が見られず、母との絆を否定的に捉えることと、自分自身、あるいは一般的他者に信頼をおくこととは関連しないことが明らかとなった。

「絆の自然発生性」は、「信頼している感」や「他人への信頼」と比較的高い正の相関(共に: $r = .29$, $p < .01$)を示している。前者は、絆は目に見えない存在であるという考えが強いほど、信頼感が存在する時の心理的効用も高いと評価しやすい傾向を、他方、後者は、一般他者への信頼が高いと捉える傾向の存在が明らかとなった。

考 察

研究3の結果、「絆」は主に「信頼されている」と「信頼している」という対人的信頼感と強い関連性を持つことが明らかとなった。しかし、この結果は、母親との絆に限定される結果であるかも知れない。時間軸からみて、母親との絆は先行しており、既に存在する絆に信頼という補強材が加わることによって絆がより安定し、母子関係がより強固になる可能性が示唆された。しかし、親以外の対象では絆関係が必ずしも先行しないため、まずは信頼関係を築くことから始まり、後に絆が発生するという順序性が推察される。研究3では、主として概念妥当性を検討したが、母親との絆関係に限定される妥当性なのかも知れない。その懸念を踏まえて、母親以外の絆対象との絆関係を検討する必要があるだろう。

研 究 4

目 的

絆関係に肯定的なイメージを抱くことは、相手との関係を肯定的に評価していることといえるだろう。また、絆関係に対する情緒性も、関係を結ぶ相手に対する情緒を表していると考えることができよう。絆とは、絆を結ぶ相手があってはじめて成立する現象であることから、二者間で関係のあり方に関する共通認識が重要といえる。どちらか一方が相手との絆関係に満足していても、もう一方が不満足、あるいは、絆を負担と思っていたら、二者間の関係に満足しなくなるだろう。このように考えると、絆関係への双方の態度やイメージに基づいて、二者間の関係満足度を検討することが必要であろう。

研究4では、母子間に存在する「絆」の理解を踏まえ、新たに、父子間の「絆」に着目し、母子間の「絆」との違いを検討する。また、母子間の「絆」と父子間の「絆」が親子間の関係満足度に与える影響も検討する。

方 法

調査協力者

関西圏の私立大学生479名(男性281名、女性198名、不明13名)を対象に調査を実施した(2006年11月中旬)。学生の平均年齢と標準偏差は19.32歳($SD = 1.22$)、レンジは18-25歳、平均の兄弟数は2.18人($SD = .97$)、レンジは0-7人、母親との同居者は482名中330名(68%)、父親との同居者は482人中298人(62%)である。

質問紙の構成(質問内容)

- ① 絆尺度：母子間や父子間の絆に対する態度を測定すべく、研究3で選定した48項目からなる尺度を使用した。そして、それぞれの項目の内容が自分の考えにどの程度該当するかを、

「とてもそうである」(6点)から「全くそうでない」(1点)までの6件法で回答することを求めた。

- ② 関係満足度尺度：母子関係と父子関係に対する子どもの満足度を測るために、金政・大坊(2003)を参考に10項目からなる尺度を構成して使用した。そして、それぞれの項目の内容が自分たちの関係にどの程度該当するかを、「とてもそうである」(6点)から「全くそうでない」(1点)までの6件法で回答することを求めた。

結 果

尺度の構造解明

母子間と父子間の絆尺度の評定データに基づき因子分析(主因子法、プロマックス回転)を別個に行った。その結果、母子間と父子間ともに同じ4因子構造となった。絆の対象(父母)で因子を構成する項目に若干の差異が存在するが、同一因子間での違いをのちの検討課題とするため、共通項目を使った4つの下位尺度を作成した。それらは、絆で結ばれると安心であり、絆は心の支えといった絆が存在することによる心理的効用を示す10項目から成る「絆の心理的効用」因子(母 $\alpha = .94$,父 $\alpha = .94$)、絆を持つことに対するわずらわしさ、憎しみ、損得などの否定的側面を示す6項目から成る「絆の否定的・不安定性」因子(母 $\alpha = .78$,父 $\alpha = .79$)、絆は目に見えない、自然にできるといった側面を示す3項目からなる「絆の自然発生性」因子(母 $\alpha = .73$,父 $\alpha = .76$)、絆に無償の愛は必要ない、やさしさは必要ないといった絆に対する情愛の不必要性を示す3項目からなる「絆の愛情不要性」因子(母 $\alpha = .55$,父 $\alpha = .48$)である。

研究2において抽出された因子のうち、「絆の心理的効用」因子と「絆の否定的・不安定性」因子と「絆の自然発生性」因子の安定性が高く、本研究においても因子として抽出された。尺度の頑健性の観点から、安定的な上記3因子に、さらなる因子や項目の追加を検討する必要があるだろう。

関係満足度尺度の信頼性を検討した結果、父母それぞれの満足度において $\alpha = .96$ となり、高い信頼性が確認された。

母子間の絆と父子間の絆の比較

母子間の絆と父子間の絆の間の違いを検討すべく、絆尺度の下位因子の得点に基づいて t 検定による差の検定を行った。その結果、全因子において有意差がみられた($p < .001$)。「絆の心理的効用」因子と「絆の自然発生性」因子においては、母親との絆の方が父親との絆よりも得点が高く、母親との絆の方が心理的効用は大きく、より自然発生的であると認識されていることが明らかとなった(Table.2参照)。

他方、「絆の否定的・不安定性」因子においては、父親との絆の方が母親との絆よりも得点が高く、父親との絆の方が若干ではあるが否定的で、不安定であると認識されていることが明

Table. 2 絆の関係間の平均値

因子名	絆	M	SD	n
絆の心理的効用	母	4.16	1.04	445
	父	3.77	1.07	445
否定的・不安定性	母	3.28	.94	461
	父	3.44	.98	461
自然発生性	母	4.67	.95	473
	父	4.52	1.01	473
愛情不要性	母	2.89	.84	468
	父	3.06	.82	468

らかとなった（得点が高いほど、絆の否定的側面を肯定）。

関係満足度への影響

母親との絆と父親との絆に対するそれぞれの態度が、実際の関係性に影響を及ぼすとの仮説のもと、絆尺度の8因子（4下位因子×2絆対象）を説明変数、関係満足度を基準変数とした重回帰分析を行った。その結果、母親との関係満足度において決定係数（ $R^2 = .76$, $p < .001$ ）が有意であり、「絆の心理的効用」（ $\beta = .65$, $p < .001$ ）、および「絆の自然発生性」（ $\beta = .23$, $p < .001$ ）からの有意な正の影響がみられ、「絆の否定的・不安定性」（ $\beta = -.17$, $p < .001$ ）においては有意な負の影響がみられた。すなわち、母親との絆が心の支えになる、うれしいと思う関係や、また、絆とは目に見えず、自然にできるものであると考える関係の場合、関係満足度が高くなること、母親との絆が不安定だと考える関係の場合、関係満足度が低くなることが判明した。

他方、父親との関係満足度においても決定係数（ $R^2 = .73$, $p < .001$ ）が有意であり、「絆の心理的効用」（ $\beta = .68$, $p < .001$ ）、および「絆の自然発生性」（ $\beta = .14$, $p < .001$ ）からの有意な正の影響がみられ、「絆の否定的・不安定性」（ $\beta = -.19$, $p < .001$ ）においては有意な負の影響がみられた。母親との関係の場合と同様に、父との絆が心の支えになる、うれしいと思う関係や、また、絆とは目に見えず、自然にできるものであると考える関係の場合、関係満足度が高くなること、父親との絆が不安定だと考える関係の場合、関係満足度が低くなることが判明した。

また、母親との関係満足度と父親との関係満足度の比較を行ったところ、父親（ $M = 4.20$ ）よりも母親との関係（ $M = 4.59$ ）の方に一層満足していることが判明した（ $t(1, 468) = 8.02$, $p < .001$ ）。しかし、母親には劣るが、父親との関係にも子どもが満足する方向にあることは重要な意味を含むと考えられる。

考 察

研究4の結果、父子間の絆と母子間の絆の対応性が確認され、また、絆関係から関係満足度

への影響を検討した結果、絆の心理的効用や自然発生的理解が絆の対象者との関係満足度を説明できることが分かった。昨今の子供問題における父親の役割が注目を集めているため、母親以外の絆対象としての父親についての検討を加えたが、親子の性的組み合わせ（例、母親と娘か息子、父親と娘か息子）も重要な要因であると推測できることから、更なる分析が必要であると考えられる。

結 語

「絆」とは、親子関係において当たり前の現象なのかも知れないが、あらためて考え直してみると極めて難解なテーマである。今回の一連の研究で垣間見られたことは、絆の形成・維持にとって心理的、情緒的なつながりが必要であるが、プラス面もあれば、「しがらみ」といったマイナス面も存在する多義的なものである。絆の相手が両親の場合、絆の存在が当たり前の事実であると認識する者が多く、そう期待もされている。また、それが子供たちとの関係満足度に直結している。つまり、当たり前が存在すべき「絆」が期待できない場合、不満の原因になると考えられるのである。特に、父親の場合、心理的、情緒的なつながりを作ろうとする努力がないと、関係満足度につながらないと考えられる。世の父親は、日頃から子供と心理的、情緒的に関わろうとする努力が必要なのである。

参考文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響、教育心理学研究、43 (4)、364-371.
- 天貝由美子 (1997). 成人期から老年期にわたる信頼感の発達、教育心理学研究、45 (1)、79-86.
- 林直保子 (2004). 社会関係と信頼：安心は信頼を育むのか、それとも破壊するのか、関西大学社会学部紀要、35 (2)、1-17.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響、社会心理学研究、19、59-76.
- 河合隼雄 (1980). 家族を考える、講談社.
- 川喜田 (1967). 発想法、中央公論新社.
- 厚生労働省 (2003). 平成15年度 福祉行政報告例.
- Rotter, J. B. (1980). Interpersonal Trust, Trustworthiness, and Gullibility, American Psychologist, 35、1-7.
- 酒井厚 (2005). 対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ—重要な他者間での信頼すること・信頼されること、川島書店.
- 高木修・戸口愛泰 (2006). 「絆」の光と影—「絆」のイメージとその構造に基づく「絆」尺度の作成—、関西大学社会学部紀要、37 (2)、3-28.
- Taylor, S. E. (1989). Positive illusions: Creative self-deception and the healthy mind. New York: Basic Books.
- 戸口愛泰・高木修 (2005a). 「絆」の光と影：(1) その構造解明、日本グループ・ダイナミックス学会第52回大

会.

戸口愛泰・高木修 (2005b). 「絆」の光と影：(2) 尺度作成の試み、日本社会心理学会第46回大会.

戸口愛泰・高木修 (2006). 「絆」の光と影：(3) 信頼性の検討、日本グループ・ダイナミクス学会第53回大会.

辻竜平・針原素子 (2002). 都市と村落の社会的ネットワークと一般的信頼、日本社会心理学会第43回大会発表
論文集、114-115.

山岸俊男 (1998). 信頼の構造、東京大学出版会.

付 記

本稿の研究1と研究2は、平成16年度関西大学学部共同研究費の助成をうけた研究であり、その報告書である高木・戸口(2006)から引用した。また、研究3は、筆者らが独自に行った研究に基づく論文、戸口・高木(2006)から引用した。研究4は、平成18年度よりスタートした関西大学経済・政治研究所の「現代産業社会と人間関係研究班」で行った研究である。